

宿縁

九月号

千葉県市川市国府台五丁目二十六番三十九号
浄土真宗 本願寺派
TEL 0477-372102 二九二
FAX 0477-372102 二六一

中原寺

南無阿弥陀仏とは 如来さまからの道



ここ数年来、小学校時代のクラスメート男女六、七人と旅行に出かけています。

このたびは夏の終わりに奈良の古き仏たちに会いにゆきました。泊まったホテルが興福寺のそばだったので雨上がりの早朝、猿沢池を散歩しつつこんな句を思い出しながら、口からお念仏がこぼれました。

手を打てば 鯉はエサと聞き 鳥は逃げ
女中は茶と聞く 猿沢池

詠み人知らずの歌ですが、猿沢池のほとり、誰かが手を「パン、パン」と打ちます。すると池の鯉はこれまでの習慣から餌がもらえるものと思ひ、岸辺に寄つてきます。また、近くにいた鳥は鉄砲にも似たその音に驚き、飛び去ります。さらに近くにある茶店では、女中は客が自分を呼んでいるものと思ひ、大きな声で「ハイ」と返事をする。そのような情景が目に見えかびます。

この歌は「一つの事にも様々な取り方がある」ということを教えています。つまり、受け手(認識主体)によって、その感じ方・捉え方も様々なので、自分の認識が絶対であるかと固執せず、多角的視野と相手への思いやりの心をもって物事を見ることが大切であるという考え方を示しています。また手を叩いた音そのものには絶対的な意味はなく、音と自分との関係性の中でしょうか、その音自体も意味をなさない、という考えを示しています。さらには客体⇨聞かれるもの(手を叩いた音)があるから主体⇨聞くもの(鯉、鳥、女中)が在る、という仏教の唯識学的な考え方とも言えます。

以前、笑い話にも似た話をご縁の深い二人から聞いた実話です。沖縄で小児科医院を開設する念仏者志慶眞先生は、来院した子どもを診断しながら、ふと「なまんだぶつ」と口からお念仏が漏れたそうです。す

ると子どもに付いて傍にいた母親が「先生、うちの子そんなに悪いんでしょうか？」と深刻な顔で尋ねたそうです。

もう一人は、今は亡き念仏者であったご門徒のFさん。お聴聞に出かける道すがら出会った知人が「車に乗せていってあげるから」の親切な声掛け、助手席に乗せてもらって、ふとお念仏が口からこぼれたところ「そんなに俺の運転が心配か？」と言われたそうです。

さて、多くの人はお念仏(南無阿弥陀仏)という、何か呪文のように思っています。だから呪文を唱えると願いが叶う、助かる、救われるように思っています。そこにはそうした状態にない人には「きもい」「縁起でもない」と受け取られるのです。まさに人間の心は様々です。また、藁をもすがるピンチにある人ならば、「助けてくださいなら念仏を唱えます」「唱えるから助けてください」という人間を超えた神や仏の存在をどこかにあると信じて、こちらから発する言葉に思えるでしょう。

仏教はそうした人間の思い込みや不確定な心理の先にさとり道は無いと示しています。特に親鸞聖人は人間の思いやはからい否定されたところに、すべての人々が称名念仏一つによってこそ救われるのが大乘仏教の真髓だと教えてくれました。

お念仏は、「称える」といいますが「唱える」とはいいません。唱えるとなると、人間がする人間の行です。称えるは、如来さまの行です。だから何回唱えたから救われるというような人間のはからいが少しも交わらないから「大行(だいぎょう)」といい、人間の

力みが少しも入りませんから自然と口から漏れてくださるのです。

南無阿弥陀仏のことを名号といいます。名号とはいっぴかなる場合でも「あなたと共に在る！」との如来さまの名乗りです。奈良のみ仏たちの仏像(木像や絵像)は、どれもが人々を救う如来さまのお慈悲をあらわしているシンボルです。でもお木像とか絵像はやはり人間が作ったものです。けれども名号は、如来さまに人間がつけた名ではありません。生まれの子に親が名前をつけるみたいに、人間が外からつけた名ではなくて、如来さま自らが内からあらわしているお姿です。私はここにいますという、如来自身の名乗りが南無阿弥陀仏です。だから名号と如来は直接に一つです。われわれは仏さまのことを考えて助かるのではなくて、仏さまの名を聞くことによって助かるのです。私たちは如来さまのことをありがたいと思つて助かるのだ、と思つている人は、自分という正体がわかっていないのです。悲しいことに私たちはその折々の縁にもようされて心は一定しないのです。ゆえに、私たちの方から如来へ向かう道はありません。ただ、如来の方から私の方へ来てくださる道があるだけです。それが南無阿弥陀仏の名号です。南無阿弥陀仏とは私如来さまの名前を呼ぶことですが、それは正確に言えば、如来さまが私の名前を呼んでくださっている声のこだまなのです。南無阿弥陀仏と私が言うのは、私から発源した声ではなくて、私の生まれる前から私を呼び続けてくださっている如来さまの声の反響に他ならない、というのが親鸞聖人の説かれた称名念仏の本質であり構造です。

【寺灯雑記】

○孟蘭盆会に併せて戦没者法要を営む
8/11

新しく制定された「山の日」の祝日、お寺では孟蘭盆会法要と全戦没者追悼法要が営まれました。

戦後71年目を迎えてもなお地球上から戦禍が絶えない人間の愚かさを思いつつ、この日午前中に参詣者は先の大戦で犠牲となつた方々を偲び追悼法要に続き孟蘭盆会法要を営みました。

ご法話は武蔵野大学教授であり国際真宗学会会長として活躍のケネス・タナカ先生が、「アメリカ発の仏教的生き方」と題し『孟蘭盆会を「歓喜会」ともいうその意味から、アメリカ人女性僧侶(ドロシー・ハント)によつて戦前作成され、今でも愛用されている「ゴールデン・チェイン」(金の鎖)のことに触れ、また、仏教徒である映画俳優リチャード・ギアの人生観・世界観を紹介しながら、すべては阿弥陀仏の慈悲という愛の「黄金のチェイン」のリンクの中につながっているのであること』をお話しくださしました。また、先生ご自身が作られた絵本「だいじょうぶだよ、へいきだよ、」をプロジェクトを使って解説しながら見せていただきました。

○子どもたちが元気に夏休みの合宿
8/20～21

第21回目を迎えた夏休み子ども合宿は年中さんから小学校6年生まで48人の子供たちが参加して、1泊2日の日程で行われました。

「世界の国を知ろう」のテーマで、初日は

12時から開会式。防災センターの見学では、地震の震度や風速などの体験学習をしました。2日目は「世界の国を知る」様々なクイズで楽しみ、また、仏さまの国を描こうと思ひ思ひの絵を作成しました。

そのほか、本堂でのお勤め、静座、笑顔の湯のお風呂、お掃除、バーベキューの食事、抹茶のいただき方、等々。閉会式では住職さんから「2日間をみんなで過ごした思い出と身に覚えたことを大切に元気でまた会いましょう」とのお話と修了証を一人一人がいただきました。そして練習した歌「WAになっておどろう」をお迎えの保護者の前で披露しました。

このたびの合宿では、かつての卒業生など若いスタッフ(15名)が中心となり、お互いがメールなどのやり取りで連絡し合いお手伝いをしてくれました。さらに初めてのことでしたが、ラインで保護者とながら、合宿の様子が伝えられました。

○婦人会が「讃寿の集い」を催す
9/3

昨年まで「敬老の集い」として会員の中の長寿者を対象としてお祝いの集いを催してきましたが、今年から全会員がお互いに「阿弥陀さまからいただいた尊いのちを讃え合う」との意味から「讃寿の集い」に名称変更して、毎年9月の第一土曜日に開催することになりました。

今回は前住さんの歎異抄第15章の法味を聞かせていただいた後、40名の参加者が昼食を共にしながら踊りや詩吟や歌などに興じて楽しみました。

【ご案内と募集】

☆秋の彼岸会法要修行

＊日時：九月二十二日(秋分の日)一時

- ・お勤め 「仏説阿弥陀經」
- ・讃仏歌 「衆会」(しゅうえ)
- ・法話 「阿彌利磨師」

(明治学院大学名誉教授) 「極論の効用」

あなたの目的地は何処ですか？
目的地のない歩みは流浪といえます。そしてその目的地は裏切らない場所でないればなりません。

浄土に往生するとはどういうことか。仏の教えを聞かなければその答えはありません。どうぞご参詣をお待ちしています。

☆門信徒親睦旅行

＊日程：十月十六日(日)～十七日(月)

(1泊2日のバス旅行)

- ・旅行代金…28,000円
- ・募集定員…40名
- ・宿泊先…石和温泉(ホテル石庭)

このたびの門信徒親睦旅行は、甲斐山梨の聖徳太子信仰を訪ねて、その由緒ある浄土真宗本願寺派の古刹萬福寺と三光寺を参拝、あわせてかつて中原寺のあった跡地をご案内いたします。

この機会をお見逃しなく、紅葉の甲斐路をゆつたりとめぐり皆さまと親睦を深めたいと思います。

お友達も誘って九月末日までに代金を添えてお申込みくださいませ。

☆第28回中原寺文化講演会

＊日時：十月二十九日(土) 一時半

- ・講師 末木文美士先生 (東京大学・国際日本文化研究センター名誉教授、宗教学者)
- ・演題 「仏教の死生観」
- ・場所：山崎製パン企業年金基金会館 (入場無料)

知人・友人をお誘いいただいでのご来場をお待ちしています。

【行事・法座案内】

○和讃に学ぶ(高僧和讃)
・九月二十四日(土) 三時

○災害の後を考えよう(公開講座)
・九月二十八日(木) 二時

講演：柴田宣弘氏 (福島県復興支援宗務事務所)

主催：千葉組仏教壮年会

○婦人会法座

・十月一日(土) 一時
歎異抄十六章(前住職)

○ランドゴルフ

・十月十一日(火) 十二時中原寺集合
松戸天真寺さんとの交流試合

○和讃に学ぶ(高僧和讃)

・十月二十二日(土) 三時

【九月の掲示板のことば】

反省は一人でもできるが
更生は一人ではできない